

特集

病院と学生教育 地域で育てる医療人

これまで医療職の教育は専ら大学での教育に主体が置かれ、特に医学教育では大学病院における臨床教育が主体となっていた。大学病院という高次機能病院での教育ということで、いきおい専門性を追求した最先端医療が重要視され、チーム医療とはいいながらも、各医療職はそれぞれに大きな部門を構成し、連携がおろそかになる傾向は否めなかった。

一方で医療職の多くは、中小病院や診療所など地域の第一線の医療機関や、福祉施設、行政機関の保健・社会福祉部門に従事することになる。専門職を育てる職業訓練としての側面を持つ医療職の卒前教育において、地域に近い職場を活用することの重要性が認識されてきたことは、いわば必然的な流れと言っていよう。地域の現場ではこういった能力が医療職に求められているのか、地域ニーズに沿った実践的かつ効果的なトレーニングが改めて見直されているのである。

今回の特集では、大学での医療職教育の新しい流れを紹介する。特に多職種の医療職を教育する大学では、学部を超えて連携し学ぶシステムとして、最近注目されている IPE (Inter Professional Education：多職種連携教育)の現状を報告していただいた。また、医師不足という喫緊の課題を背負う大学医学部からは、地域枠制度に則った医学教育での取り組みをご紹介いただいている。

そして一方、学生を受け入れる医療機関からは、地域における実習の実際と、そこでの問題点、もたらされる効果、恩恵などを述べていただいた。そこで共通していることは、これまで受け身に捉えられがちだった学生実習をむしろ積極的に呼び込んでいること、学生教育を通して現場の職員の医療専門職としての意識を高め、サービス全体の質を高めていること、さらに質の高い医療職の確保に活かしていることである。

地域で育てる医療人——、限られた人的資源の中、多職種が連携することで、地域に求められる医療ニーズをお互いに肌で感じながら学ぶことができ、それが本来の医療職としてのプロフェッショナリズムを培うことにつながる。こうした流れが将来、医師の地域偏在や医療格差を解消してくれることを期待したい。

山田 隆司

台東区立台東病院 管理者・病院長